

## 中国からのアプローチ ——中国の『一带一路』構想における中央アジア——

三船 恵美

「一带一路（「シルクロード経済ベルト」＋「21世紀海上シルクロード」）」構想とは、中国が主導する地域協力圏の構築を通して、中国国内の過剰生産能力を解消して内需不足を補うだけでなく、エネルギー資源貿易の輸送ルートを確認し、人民元の国際化を図り、中国を中核とする政治と経済の勢力圏を構築する構想である。いずれも一本の道ではなく、幾重にも広がる多数のルートの束から成る政治と経済の協力「圏」の構想である。「シルクロード経済ベルト」は、2013年9月に習近平がカザフスタンで講演した際に打ち出した地域協力構想である。習近平は、同構築を呼びかけるにあたり、中国の独立自主の平和外交、内政不干涉、領土問題などの重要な核心的利益にかかわる問題での相互支持、SCOの枠組み内での相互信頼の強化、「3つの勢力（分離独立勢力・宗教過激派・国際テロ）」や国際的組織犯罪の取り締まりなどの安全保障協力の推進、などを強調した。「一带一路」は経済協力の側面にばかり注目が集まりがちであるが、「一带一路」には、エネルギー戦略、SCOやCICAなどと連動させる地域安全保障戦略、アメリカの「リバランス」政策への対抗、SCOやBRICSなどと連動させる既存の国際秩序への挑戦と世界の多極化の推進、中国の現代化建設や開発とのリンケージなど、多様なねらいがある。中国の外交戦略や安全保障戦略は、鄧小平時代から、常に、世界のなかにおける中国の位置づけを勘案し、安全保障と経済建設の課題に取り組むのにあたり、誰を頼るのか、誰を結集するのか、誰に反対するのか、の問題を明示してきた。「一带一路」は、この考え方によって構想されていると言えよう。

では、中国は中央アジアへどのように関与を深めようとしているのであろうか。習近平は、2013年に「5通」の強化を通じて「シルクロード経済ベルト」を形成しよう、と呼びかけた。「5通」とは、政策面における意思疎通、交通輸送ネットワークの形成、貿易の円滑化の推進、資金の融通と通貨流通の強化、相互理解の深化、の5つのコネクティビティの強化である。習近平は、まず、経済的な繋がり構築と相互協力を始め、「5通」からさらに発展空間を拓き、協力関係の領域を拡大させていくという構想を打ち出した。中国版スピルオーバー仮説とも言えるであろうか。

中国の対中央アジア戦略の中軸は、エネルギー安全保障、周辺安全保障、対米露戦略の3つの安全保障政策の強化にある。中国の対中央アジア外交は、民主化やイスラームに対する脅威・エネルギー資源・大国間パワーゲームなどに対する多様な安全保障戦略のもとにある。

報告の最後に、中国の「一帯一路」を通じた中央アジアへの関与の増大に、どのような影響や課題があるのか、その「主な点」として次の8点を指摘した。まず、「一帯一路」構想の成功の鍵が露印にかかっているという点である。第2に、輸送インフラにけるコネクティビティの課題である。第3に、中央アジアにおける中国の経済プレゼンスの台頭に対して、ロシアが中国と経済と安保の棲み分けができるかの課題である。第4に、中国の経済覇権の課題である。中国政府が昨年3月に公表した「一帯一路」のヴィジョンに拠れば、中国は「一帯一路」による金融協力の深化によって「アジアの通貨安定システムの構築」を目指している。「国際金融のトリレンマ論」に従えば、AIIBプロジェクトなど「一帯一路」が推進されて人民元の国際化が進む場合、中国に経済的依存度が高い国々では人民元に対して自国通貨を安定化させるような金融政策や制度を採っていくことになる。周辺諸国との「協調」によって共同で構築する制度下ではなく、AIIBを中軸とする「一帯一路」を通じた市場メカニズムによって人民元をアジアの基軸通貨にしていけば、中国は特定の協調制度を維持するために国際公共財を奉仕する「節度」や「義務」を中国が負うことなく、基軸通貨の「特権」だけを楽しむことになる。第5に、経済的な中国の台頭と安全保障におけるロシアのコストのバランスの問題である。第6に、「一帯一路」を通じた地域安全保障の協力の限界である。第7に、「一帯一路」のプラットフォームとしてSCOを活用していこうとする一方で、SCOのフレームワークではなかなか進んでこなかった通関、交通インフラ、金融、電子商取引、検疫などの条件を統一化させ、手続きを簡略化させる協力協定を早期締結できるのかという課題である。最後に、現代化建設と少数民族問題である。

以上で指摘した主な課題をはじめ、中央アジアにおける中国の「一帯一路」構想には、まだまだ実現に向けて多くの課題が残されている。

(駒澤大学)